
溺れる、連鎖

miz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

溺れる、連鎖

【NZコード】

NZ520X

【作者名】

m_i_z

【あらすじ】

はじめに言つておきますが今からお話しすることは誰が犯人だとか、どうしてこのようなことが起こったのかを供述するわけではありません。ましてや僕の罪を軽くしたいわけでもありません。ただ真相をお話しするだけです。

”××山荘殺人事件”の犯人として捕まつた楨は三つの事件と三人の人間にについて語りだす。関連性のない事件だと思われていた三つの殺人事件はやがて連鎖し、真相が見えてくる

始まりの事件はひりりへ

7月29日

これはこれは。わざわざお出でいただきありがとうございます。まあお出でいただかなければこうして会えないのですからショウガナイですね。

あれ?笑えませんか。ちょっととしたジョークだったのですが……。

そんな恐い顔しないで下さい。男前が台なしですよ。

…もしかして僕のこと覚えていませんか?ああ、名前ですか。はじめてあなたと出会ったときは違う名前を名乗つていましたものね。まき槇、これは偽名です。

怒っているのですか。でも僕がこうなることはあなたが一番分かっていたはずだ。さうでしょ?でなければ僕はあなたをこうしてお呼び立てしませんよ。

さあ本題です。僕があなたを呼んだのは”××山荘殺人事件”についての真相をお話しようと思つたからです。真相。そう、真相。真実ですよ。

はじめに言つておきますが今からお話しことは誰が犯人だとか、どうしてこのようなことが起こったのか、つまり動機を供述するためではありませんし、ましてや僕の罪を軽くしたいわけでもありません。変な勘違いはしないで下さい。ただあなたの胸に留めておいてくれればいいのです。間違つても口外はしないで下さいね。だつたらなぜ話すのか。そうですね。数週間前に”××山荘殺人事件”的の唯一の生き残りの青年が自殺したと新聞で読みましてね。彼がいなくなつたのであれば黙つておく必要はないと思つたからです。でなければ彼が浮かばないと思つたからです。

僕は彼を愛していましたからね。ゲイ?いえ、それとはちょっと違います。そういう愛ではありません。いやもうそれはいいでしょう愛について談義したいわけではありません。

しかし、暑いですね。あなたと出会ったころを思い出します。あなたと出会ったころもこんな蒸し暑いときでしたね……。

そうだ。今から思えば”××山荘殺人事件”は12年前に起きた”××通り魔連續殺害事件”からはじまつたように僕は思います。つまり僕とあなたが出会った、あの事件です。

”××通り魔連續殺害事件”的詳細を教えていただけませんか？あの頃交番勤務だったあなたが今はこうして立派な刑事になったのです。以前よりかは事件の詳細が分かつたではありませんか？もちろん話せるところだけで結構です。

お願いします。

7月19日

夕日が射しこむ学校の屋上が好きだ。フェンスにもたれ足を投げ出し目をつむり何も考えずただ風を感じる。

小さく風が吹くと長い前髪が揺れた。たぶん他人が見たらうつとうしい髪型なんだろう。クラスメートに驚掴みにされ「うつとうしげ」と言われた。そういうヘアースタイルが好きなのかと聞かれればそういうわけじゃない。どうでもいいのだ。

目をつむっているとつむさいセミの鳴き声と先ほどまで僕を殴っていたクラスメートたちの話し声が聞こえた。

なああと何人殺されると思つ?

オレ隣に住んでるヤツが怪しいと思つてるんだ。

楽しそうに話すヤツ。推理をしだすヤツ。彼らが話しているのはこの町で起きた連續殺害事件のことだ。この一ヶ月で一人ものの女性が殺された。こんな小さな田舎町で殺害事件が起こるだなんて誰も想像していなかつただろう。もちろん僕もそのうちの一人なのだが。下校時刻ぎりぎりまで屋上で過ごしてから帰路に着くようになる。クラスメートたちに会うのも煩わしいし家にいるのも好きではなかつた。帰宅路を歩いているといつもなら人の気配がする住宅街も殺害事件が起こつてからは随分と静かになつてしまつた。みんなが助け合つて生きているような温かい町だつたのに寂しいもんだな、とレクイエムのように鼻歌を歌つた。

短い住宅街を抜けると小さな駅があり、そこは打つて変わり警察官やマスコミが増えていた。今まで人の出入りがなかつたラーメン屋も満員になるほどだ。

その横を通りすぎると改札の横に交番があるのだがいつも年老いた警察官ではなく若い男が立つていた。今回のことであつて若い警察官に交代したのだろうか、とつい見すぎてしまつたのか若い警察官は

「おかえり」と笑いかけた。嘘っぽい笑顔だった。だけどこういう人たために”好青年”という言葉があるのだろうと理解した。
小さくお時儀をしてすぐさま過ぎ去った。

「一ヶ月も経つのに犯人が捕まらないなんて」

母は怒るように新聞を弾いた。テーブルでご飯を食べる僕、その前で話す母。いつもの光景だつた。

「別にこの町でなくとも仕事はできるし引っ越そうか？」
母の話はつづく。返事もしていないのに。疑問形で投げかけてくるくせに母は返事を待たず話をつづける。父が母と離婚を決めたのもなんとなく理解できた。母は話しだすと止まらない。自分が納得できるまで話しながらどんどんと進んでいく。どんどんどんどん。取り残される。

僕たちと母のあいだにできた距離は少しずつだけどでも確実に大きな大きなものになっていき、そして修復不可能なまでの距離になってしまったのだ。

7月20日

顔を殴られた。体を殴られたり蹴られたりすることはよくあつたが顔は初めてだつた。容赦がなくなつていくんだな、と他人事のようにぼんやりと考えていた。

屋上で過ごす放課後、唇の端をさすりながら溜息をついた。
このもたれ掛かっているフェンスが壊れこのまま一緒に落ちてしまつたらどうなつてしまふのだろう。落っこちる自分を想像する。まづ頭が割れて体が地面に叩きつけられ骨が砕け肉が飛び散るのだろうか。想像するとぞくぞくした。

ガタン、と扉の開く音がしたので咄嗟に身構えた。開いた扉に田をやると同じクラスの女子が脅えるようにこちらを見ていた。
この時間に屋上へくるヤツは今までいなかつたので少し驚いた。

「あつ……」「めんなさい」

彼女はか細い声でつぶやいた。

「梶……く、ん」

居座る氣なのか、と言つよつて睨みつけると彼女は泣き腫らした目をしていた。そういえば最近クラスの女子から無視をされていたことを思い出した。ただのケンカだと思っていたがケンカにしては期間が長いような気もした。

「唇……切れてるよ」

彼女は僕の側にきて、はい、とハンカチを差し出したが目をそらして。無言で立ち上がりその場を去るうとしたが腕を掴まれ制止された。

「待つて……！……あたし、あたし、」

彼女は必死なのか腕が痛くなるほど力いっぱい握りしめていた。そして溜まっていたものを全て吐き出すようにまくしたてた。

「しつづ 死にたいんだつ 梶くんは、どうして死ななかつたの！」

？

”どうして死ななかつたの” その言葉を聞いて彼女は僕を探してここまで来たのだと分かつた。彼女はたぶん、僕の手首に残る傷跡のことと言つているのだろう。

彼女の想像通り、僕は一度だけ自分の手首を切つたことがある。学校に馴染めない自分。いつのまにか始まつた暴力。話はじめると止まらない母。躊躇うことなく簡単に手首を切つた。だけど切つた途端なんだか違う、と感じた。死にたいとは少し違う。でもそれが何なのかなは分からなかつた。ただ思つた以上に興奮していつまで深く切つたつもりはなかつたが血が止まらずどくどくと流れつづけていた。その流れる血をながめながら心の奥底で「失敗した」と囁く冷静な自分がいた。

失敗したのは深さではなく母だった。案の定病院に運ばれた僕の隣で母は狂うほど泣き叫んでいた。「どうして」と母はもちろん医者にも聞かれた。もとつもらしい嘘をついた。「父がいなくて寂しか

つた」半分ウソで半分ホントだ。

「なに？お前死にたいの？」

彼女は深刻そうな顔をして頷くので鼻で笑ってしまった。

「クラスの女子に無視されてるだけで？ぐだらねえ」

「……でも、でも梶くんも死にたいからリスク力したんでしょう？」

「はつ お前と一緒にすんな」

そう吐き捨てて屋上を後にした。

階段を下りている途中、母を思い出していた。この町に引っ越ししてきたころ隣に住むおばさんは「困ったことがあつたら言ってね」と言つた。優しくて親切そうな人だつた。だけど母は何が気に食わなかつたのか「お節介ね」とおばさんが帰つた途端に冷たい声で吐き捨てた。そのときの母の声と彼女に吐き捨てた僕の声が似ていたような気がした。

学校を出ると夕日が沈みかけていた。綺麗なオレンジ色をした空が黒く塗りつぶされていくような不気味な空だつた。

住宅街にさし掛かる前に木々や雑草が生い茂つた薄暗い場所がある。昨日と同じように鼻歌を歌いながら歩いているとそこからかさかさという小さな音とともに僅かに雑草が揺れていた。風か何かだろうと思つていたのだがその音と揺ればだんだんと大きなものとなつていつた。

すると突然生い茂つた雑草の中から少し太つたガタイのいい男が息を切らしながら現れた。顔は見えなかつたが少し慌てているようにも見えた。反射的に物陰に隠れその様子を見ていると男はそのまま僕の存在に気づかず逆の方向へと歩いて行つた。

その場所から動くことが出来ず心臓はどきどきと早く脈打つっていた。心のなかで「もしかして」という予感があつたからだ。

もしかして。もしかして。もしかして。

男が現れた草むらへ近寄つて見ると生い茂つた草むらに男が通つたであろう道が微妙に出来あがつていた。辺りを見回し誰もいないこ

とを確認してから草むらへ一步、足を踏み入れた。

もしかして。もしかして。もしかして。

足を一步一歩進めるたび自分の口角が上がっていることに気がついていた。だけど進むことに夢中になつていて「どうして」という気持ちはなかつた。

歩みを止めず男が通ったことで出来た道を歩いた。草が踏まれ青臭い独特の臭いがした。一步、一步、いつの間にか早歩きになつていた。セミがうるさく鳴きつづけ体から汗が流れ落ちるのを感じる。無造作に汗を拭っているとぴしゃりと何かが跳ねる音がした。

真っ赤、そんな言葉が頭に思い浮かんだ。

た。 女の人が仰向けになつて倒れている。腹部からは赤黒い血だと思われるものが飛び散っていた。ああ、残酷。残酷だ。もう少しで腹の中が見えてしまいそうなほどへこんでしまつている。息が荒くなつ

咄嗟に膝をつき鞄で下半身を隠した。自分の息遣いが真横で聞こえる。はあ。はあ。はあ。はあ。そつと鞄を持ち上げ下半身を確認した。

興奮している。

人が死んでる。

元いた道に戻つたあともそのまま走りつづけた。

彼女は刺されていた。何度も何度も刺され腹がへこみ中身が見えそ

うになるまで。その場にうずくまりとうとう吐いた。そして一瞬で視界が真っ黒になり消えてしまった。

誰かの声がした。でもだんだんと遠くなつていく。意識が遠くなつていく。

助けて、誰か。ここは暗くて恐い。

三人目の死体

階段を上っている。辺りは真っ暗なのに黒い階段を上っているのが分かる。ああ、夢だ。これは夢だ。夢をみている。夢のなかで僕は疲れ切つていてこの階段を上りたくないのにどうしても上らなくてはいけない気がしている。はあ。はあ。はあ。真横で自分の息づかいが聞こえる。しばらく上りつづけていると踊り場が見えた。でも階段は螺旋階段になっているようまだまだ上へとつづいている。

踊り場に到着すると膝を抱えしゃがみ込んだ。すると横から扉が開くような小さな光が射しこみまぶしく照らしはじめた。その小さな光をたどり中を覗きこむと、僕がいた。小学生の僕と父。以前住んでいた家のテーブルに向かい合わせになり座っていた。俯く僕にそれを見据える父。見たことのある光景だった

「僕は父さんといたい」

「お母さんが寂しがるよ。それに一緒に暮さないだけでいつでも会える。」

そう言って父は笑った。

だけど父は、母と別れてから一度も会いに来ることはなかった。恨みはしない。父は普段から嘘つきだった。

子供は嘘つきだと言った大人は誰なんだろう。大人だって子供と同じくらい嘘つきだ。違うのは嘘がうまくすつかり騙されてしまうことだ。

目が覚める感覚が嫌いだ。頭がぼんやりとしてこれが現実だと突きつけられるような気がする。今までみていた夢が幸せなものだったとは言わない。けれど現実よりもずっと幸せだった。

「あ、目が覚めた?」

「……」

見慣れない天井、見慣れない人が覗きこんでくる。起き上がりうとするとその人は「横になつてたほうがいいよ」と嘘っぽい笑顔で言った。

たしかこの人は交番の前にいた警察官だ。覚えてしまつような目立つ顔立ちはしていないがこの笑顔で分かつた。

「君、道端に倒れてたんだよ。病院に連絡しようと思つてたけど……」

「平気？」

「……平氣です」

「じゃあ冷たい飲み物持つてくるね」

そう言いながら彼は奥の部屋へと消えた。

ここは交番だらうか。窓に田を向けると外はすっかり暗くなつてい

た。だけどセミは相変わらずうるさく鳴きつづけていた。

耳に残るセミの鳴き声、汗が流れる感覚。また呼吸が荒くなりそうになるのを堪え大きく溜息をついて落ち着かせた。

「麦茶しかないんだけどいいかな？」

警察官は僕の側に座りコップいっぱいに注いだ麦茶を差し出した。それを受け取り休むことなく一気に飲み干した。

「熱中症かな？ 倒れてたときすごい汗だつたんだ。」

彼は遠慮なしに額に手を当てた。人に触れられるのが苦手だ。だけど振り払うのも躊躇われたのでガマンした。

「君、名前は？」

「……梶です……」

「じゃあ梶くん。家に電話して親御さんに迎えに来てもらおうか？」「いえ……、結構です。」

「……でも……」

「僕、片親なので心配かけたくないんです。」

こういうと大人は「しまつた」という顔をして引いてくれるのを心得ていた。この警察官もまた同じだった。申し訳なさそうな顔をして「そつか」とつぶやいた。

この人は両親がいて兄弟がいてきつと幸せな家庭に育つたのだろう。

僕はそういう二オイに敏感だった。両親がいる人は本当に幸せなのかそれとも幸せそうにみえたのかは分からないが僕とは違う何かを持つているような気がしたのだ。

「じゃあ送つて行くよ。最近じゃこの辺も危ないしね。」

送つて行くという申し出を断つたが彼はそろそろ巡回の時間だと宣言してパートナーに押しこまれた。

車に乗るのは何年ぶりだろう。父も母も免許は持っていたようだが車は持つていなかつた。最後に乗つたのは救急車だ。そのあいだ意識は朦朧としていたのでよく覚えていない。

窓の外をながめていると何を思ったのかは分からぬが警察官は窓を開けてくれた。長い前髪が激しく揺れて少し痛かつた。

「梶くんはかっこいいね。学校でモテるでしょ？」

「……え、別に。」

「何年生？」

「高一です」

「一番いい時期だねー」

何をとつて一番いい時期だと言つてゐるのかは分からなかつた。けれどこの人にとって高校一年生が一番楽しい時期だつたということは分かつた。曖昧に返事をして窓の外をながめつづけた。

家の近くに止めてもらいお礼を言つてパートナーが見えなくなるまで見送つた。そのあいだ父のことを考えていた。嘘つぽく笑う彼は父に似ていたのだ。

家に帰るとすぐににあるだけの新聞を集めた。もちろんこの町で起つてゐる殺害事件の記事を読むためだ。

自分の部屋に戻り新聞を広げた。ほとんどが一面になつていた。

殺害がはじまつたのは6月23日。一人目の女性が殺された日だ。

腹部を何度も刺されたことによる外傷性ショックが原因で死亡。動機は不明。

二人目の女性が殺されたのは7月7日。一人目の女性が殺されてか

らちょうど一週間後に同じ殺害方法で失血死が原因で死亡。」ちらも動機不明。

やはり腹を何度も刺されている。だけど僕があの死体を見たとき、一番最初に目に入ったのは口紅だった。それなのにそのことは一切書かれていなかつた。

携帯電話をポケットから取り出し日付を確認すると今日は7月20日。二人目の女性が殺されてちょうど一週間後で殺害方法も同じだ。三人目の女性だけに塗っただけかもしれないし模倣犯という可能性もある。違うのだろうか。僕が見たあの男はこの事件の犯人ではないのだろうか。

ベッドに横になり目をつむると死んでいた女人を思い出してしまつた。

「眠れねえ……」

7月21日

朝、目を覚ますとすぐに朝刊を取りにポストへ向かつた。そして新聞を読みながらニュースを見ていたが三人目の女性については何も報道されていなかつた。

まだ見つかっていないのか。内心ほっとしている自分がいて慌てて打ち消した。

母が朝食にと用意したトーストを齧る。食欲がなかつた。

眠っているときも夢をみた。あの階段を上っている夢だ。夢で疲れ果ててしまい現実でもうまく力がはいらなかつた。

全ての授業が終わるとクラスメートたちの暴力がはじまる。日課のようなものだつた。授業が終わり屋上へ向かおうとカバンを持ちあげると、いつもそのタイミングでやつてくる。だけど今日は少し違うようだつた。カバンを持ちあげると昨日屋上にやつて来た女子が駆け寄つて來たのだ。

「梶くん……あの、あの、」

「小川さん、梶くんに急ぎの用？オレたち梶くんに急ぎの用がある

からまた今度ね。」

やつ思つたのは一瞬のことだが。ほんの少し早くやつてきたのが昨日の女子つでだけでクラスメートたちは変わらずにやつてきた。昨日の女子はクラスメートのひとりに軽く押しのけられようとして

「もしかしてお前、小三れんどうをやめてんの?」

ひとりが甲高く笑いだすとみんなが一斉に笑いだした。下品な笑いかたに虫唾が走った。昨日の女子は俯いたまま青ざめていた。

いつのまにか

本当にいつのまにか真ん前にいたクラスメートの顎に自分の拳がめり込むのが見えた。殴っていたのだ。いつのまにか、なんてこと本当にあるんだ、と心のなかにいる冷静な自分がささやく。クラスメートの顎を殴つたあと自分の拳をながめた。痛い。でも外傷はなかった。

クラスメートは倒れこんでいた。すると突然視界がぐにゃりと曲がった。曲がつてしまつた視界が少しずつ元に戻ると同時に隣にいたもうひとりのクラスメートに殴られたことを思い出していた。

「泥くろん！ 血！」

昨日の女子が驚いた様子で僕を見下ろしていた。

血生臭いにおいがする。痛みがあるところに手をやるとべつたりと血がついた。鼻血だ。クラスメートたちは倒れこんでいたクラスメートを抱え教室を出て行くところだった。

昨日の女子は「血まみれだよお」と泣いているのではないかと思うほど震えた声でハンカチを差し出した。受け取らず立ち上がることも出来ずにいると女子は無理矢理口元を拭つた。振り払う気力もなく田をそらしたまま窓の外に見える夕日をながめていた。

いつのまにか教室には誰もいなくなっていて聞こえるのはセリフの「

るさい鳴き声と部活動を行つていてる掛け声。

「……名前、なんていうんだっけ？」

「……小川です……小川真樹おがわまき……」

そして小川がすすり泣く声だった。

やつと鼻血が止まり学校を出たときには夕日は傾き小川を家まで送り届けたころには辺りは薄暗くなつていた。

少し遠回りになつたが死体がある雑木林へ向かつた。死体はまだあるのだろうか、という興味だった。今朝は報道されていなかつたのだ。まだあるはずだ。

雑木林にたどり着くと昨日と同じように辺りに誰もいないかを確認してから一步を踏み出した。中に入ると辺りはよりいつそう真つ暗でほぼ何も見えず手をぐりで前へ進んだ。進んで進んでいくと何かを蹴つてしまつたような感覚があつた。

ポケットからそっと携帯を取り出し待ち受け画面を開くと明かりが点つた。その小さな明かりで足下を確認すると足が投げ出されたようなかたちで横たわっていた。その場にしゃがみ込みその足をながめてみるとストッキングは破れてしまつていた。だけど細くて綺麗な足だつた。明かりを移動させると長い脚がつづき赤く染まつた腹部、胸部、首まで照らしたところで携帯を閉じた。顔は見れなかつた。

真つ暗な中、僕と死体と二人きり。一人？一人だろうか。

不意に涙が溢れだしていた。一、二度制服の裾で拭つたが涙が止まる気配はない。せめて声が漏れないよう腕に噛みつき涙を流した。流れる。流れる。流れる。今日は体中の水分がこれでもかつていうくらい流れていつてしまつたように思う。それでも僕は干からびて死んでしまうことはないのだ。

死体の臭い

駅前を歩いていると名前を呼ばれる声がした。声の主を探すと交番の前で手を振つてゐる警察官がいる。どうも、とくように小さく頭を下げるとき笑顔で手招きをされ顔が少し引き攣つた。なんだかこの人は苦手だった。苦手な大よその要因は父に似ているからだろう。お時儀をしてしまつた以上無視するのは躊躇われた。

彼の近くに行くと大げさに「じゃーん」と言いながら手を前に差し出した。手の上にはココアボールといつ小さなお菓子のケースが乗つていて。

「え？……あの……」

「ココアボール嫌いだつた？」

「いえ、じゃなくて……」

「じゃああげる。毎回おばあちゃんにいっぱい貰つたからさ。」

「…………はあ…………ありがとうございます…………」

ココアボールを受け取り制服のポケットに入れた。「それじゃあと去ろうとしたが昨日みた新聞のこと思い出した。

「あの、この町で

「梶くん……」

突然話しが遮られ何事かと思つたが鼻からぐりりとした感触がした。ああ、また鼻血かと確認しようとすると警察官はすばやく自分の腕の袖で僕の鼻を拭い押さえつけた。あまりにも早く自然な行動に驚いてしまつて言葉がでなかつた。まだ二度しか会つたことのない人に咄嗟とはいえ嫌な顔ひとつせずむしろ心配そうに自分の制服で拭うなんて。僕ならきっとできない。彼は警察官だから、とも思えなかつた。

警察官は慌てながら僕を椅子に座らせ袖をタオルへと代え押さえつけた。

「もしかして殴られた？」

「え……？」

「鼻の横にアザができてきた……」

「ええ……、まあケンカです。」

「そつか」と警察官は小さくつぶやきほほ笑んだ。

確かに殴られてからずっと痛みはあった。だけどアザができるほど強く殴られているとは思わなかつた。誰にでも見えるところにアザをつくるて僕に対する”暴力”を知られてもいいのだろうか、と溜息をついた。少なくともこの警察官は察したはずだ。知られたくないわけではないが知つてほしいわけでもない。

母が知るとあのときのように泣き叫び僕の高校生活を間違いなくめちゃくちゃにする。家族を壊したように。母が悪気がないのは分かつている。分かつているから恨めずにはいるのだ。

警察官に身をまかせていると足下に何かが触れる気配がして悪寒が走つた。わっと足下を見ると猫が人懐っこく足にじゅれついてきていた。

「猫、嫌い？」

「いえ……、別に。驚いただけです。」

「マキつていうんだ」

「え？」

「猫の名前」

「飼つてるんですか？」

「まさか。ミルクを飲みに行くだけ。」

警察官はタオルをそつと離すと「止まつた。止まつた。」と安心するように笑い奥の部屋へと消えた。

僕は足下でじやれながら寝転がつている猫を見下ろした。猫は笑うような表情で幸せそうにしていた。軽く蹴つてみたがそれにも気づかず「ごごご」と喉を鳴らした。

遊んでいると思っているのだろうか。幸せなヤツ。

警察官が戻つてくると両手に平べつたい皿とマグカップを持っていた。それは予想どおり皿を猫の前に置きカップは僕に差し出した。

ミルクだった。猫と同じ。受け取らずにいると彼は「嫌い?」と訪ねた。

「……名前……聞いてませんでした」

「ああ、そうだね。俺は志紀と言います。よろしく。」
そう言つて彼はカップを持つていない手を差し出した。だけど僕はその手を握らずカップを受け取つた。ミルクを飲むふりをする。顔は見れなかつた。きっと屈託なく笑い温かい手をしているのだろう。握れない。どうしても。

7月22日

「カウンセリング受ける人は今日までだからねー」

先生がそう言うと女子からは落胆の声が聞こえた。

事件が始まつてから学校では保健室にカウンセラーが導入された。女子が「カウンセラーはイケメンだ」と話しているのを聞いたことがある。本来のカウンセリングという目的を忘れ雑談に行く女子が多かつたのだ。

クラスの担任が出ていくと同時に「かーじくん」と笑いながらクラスメートたちに囲まれた。

明日から夏休みだというのにクラスメートたちは最後の最後まで暴力を振るつた。「しばらくは殴れないからな」と笑いつも以上に殴られていたような気がする。だけどしばらく暴力から解放されるのだと思つたら少しほつとできた。

血生臭い二オイとともに屋上でぼんやりとしていると小川がやつてきた。いつものように目に涙をいっぱい溜めていた。

「ひどい……」

「……」

「このままだと酷くなる一方だよ

「……どうしきつての」

「わかんない」

小川はどうとう泣きだした。

わからない、そう小川が分かるはずがない。彼女もクラスの女子から無視されつづけている。そんなヤツに暴力を止めることが出来ないはずがない。

小川は、僕のために泣いているかのように涙を流す。でも本当は自分と僕を重ね合わせ泣いているのだ。無力な自分。カッコ悪くて誰にも助けを求められない自分。惨めな自分。どうすることも出来ない自分に涙を流している。

「帰ろう」

小川は小さく頷いた。

交番の前を通りると警察官の姿はなかった。巡回の時間だらうかと横切ろうとすると猫の小さな鳴き声が聞こえた。辺りを見回しても猫の姿はない。ふと交番の中をのぞきこむと猫がこちらを見て座っていた。

扉を開くと足下にすり寄り高い声でにゃーと鳴いた。ミルクが欲しいのだろうか。昨日もこのくらいの時間にミルクを飲みに来ていた。すぐ近くにあるスーパーに行き小さな紙パックの牛乳を買うと急いで交番へ戻った。床に猫用のものだと思われる器があつたのでそこに牛乳を注いでやると猫はゅっくりと牛乳を舐めだした。

猫は犬と違つて上品に舐めるのだな、とほんやりとながめていた。母と父が離婚をする前に犬を飼っていた。白い犬だった。その犬は僕と父に懐き賢い犬だった。大好きで大好きでずっと傍にいたかつたが父が引き取り会えなくなってしまった。

今から思えば父にとつて僕は犬よりも価値のない存在だったのだろうか。

牛乳を舐める猫の背中を撫でると少しビクリとしたが器から口を離すことなく舐めつづけていた。少し汚かつたが白い毛並みで昔飼っていた犬と似ていた。温かかった。撫でつづける手が震える。

「梶くん」

突然の声に驚き振り向くとそこには志紀さんがいた。

「「」めん。驚かした？」

「いえ……」

「……お、マキヒミルクやつてくれたんだ。」

「はい、すみません……。」

「ううん、ありがと。」

頭をがしがしと力強く撫でられていうと志紀さんの後ろにもうひと
り警察官がいることに気がついた。彼と同じく「」の若い警察官だ
つたが冷たい皿をする男だった。

「帰ります」

「え、あっちょ」

志紀さんは僕を呼びとめようとしていたが氣づかないふりをしてそ
の場を去った。

走っているとポケットに違和感を感じた。手を入れてみるとココア
ボールと書かれた小さな箱が出てきた。そういえば昨日志紀さんが
ら貰つたお菓子をそのままにしていた。
文字の下で鳥のようなキャラクターがワインクをして「」をみて
いた。

「変なの」

もう一度ポケットにつっこんだ。

8月

夏休みに入つてから毎日のように死体のある場所に通つた。死体は
だんだんと腐敗が進み、鼻を押さえても分かるほどの強烈な臭いと
なつていた。服にもその臭いが染みついているような気がした。

目を覚ますと手のなかにあるTシャツをぎゅっと握りしめていた。
相変わらず階段に上りつづけている夢をみていく。その夢をみた日
の朝は必ず汗でびつしょりになつていていた。上に昇るにつれてなんだ
か僕が僕じゃなくなつていくような気がした。
あの階段はどこにつづいているのだろうか。

「ちょっと髪伸びすぎなんじやない?」

「……」

「お金あげるから切つておいでのよ

母と朝食をとつていると前髪を摘まれそう言われた。財布から一万円札を取り出し机の上に置いた。

「学生は夏休みがあるからいいよねー」

母は話をつづけながら玄関へ向かつた。テーブルに置いた一万円札をポケットに入れドアが閉まる音に耳を傾ける。ドアの閉まる音がすると新聞へと手を伸ばし、この町で起こっている事件の記事を探した。事件の記事を探し出すと綺麗に切り取つてノートに貼りつける。それが毎日の日課となっていた。見出しに”××通り魔連續殺害事件”と書かれていた。以前のものよりも文字はだんだんと小さなものになつていた。今まで貼りつけていた記事ペラペラとめぐりながらながめていると、ふと思いついたち母の部屋へ向かつた。

母の部屋の扉を開くと化粧品のどくとくの一オイがした。真っすぐ化粧台へ行き化粧品が放りこまれている引き出しを開けた。こんなに使うのかと思うくらいの口紅がぎっしりと詰めこまれていた。そのなかから死体の唇に塗られていたような赤色のものを探しだし。見た目は違うものの赤色の口紅はたくさんあつた。ひとつを適当に選び蓋をあけ下部を回すと口紅は真っ赤な姿を表した。

化粧台の前に立ち自分の姿を映す。口紅をそつと自分の唇にあて、そのまま唇の形をなぞる。死体は唇から外れ顎あたりまで塗られた。再現するように力強く顎のあたりまで塗つてみると力が強すぎたのか口紅は根元から折れて落ちてしまった。

鏡に映る自分。死んでいた女人が重ね見えた。

家にインター ホンの音が鳴り響き、はつとなり我に返るよつだつた。

僕は何をしているのだろう。

慌てて洗面台へと走り顔を洗つた。洗つて洗つて鏡を覗きこむが真っ赤な口紅はとれない。何度も何度も石鹼をつけて洗い何度も何度もタオルで拭き取ると跡は残つて いるような気はしたがなんとか流れ落ち、大きく溜息をついた。

駅前には警察官とマスクの姿しかなくなっていた。学生が夏休みに入ったことで町の人たちは事件から逃げるより田舎に帰ったまま戻ることがなかったのだ。

交番の前を通り志紀さんがいた。夏休みに入つてからは猫にミルクをやるために毎日のように交番へ通つた。もちろん志紀さんしかいないうきだけにしてこる。

「おはよう」

彼はいつも笑顔で笑つた。志紀さんはいつもが恥ずかしくなるほど飛びきりの笑顔で笑う。ときどき疲れてしまわないのだろうかと考えることもあるが毎日その笑顔は絶えることがなく父とは違う本物の笑顔なんだと思えるようになつていた。

「おはようございます」

「今日は早いね」

「はい。髪を切りにいこうと思いまして。」

「そ、うなんだ。……あ、俺が切つてあげようか？」

「え、え……」

「俺こいつみえても美容師を目指してたんだよ」

彼は悪戯っぽく笑い美容師を目指していたことを話してくれた。家族に大反対されて警察官になつたこと。彼の家族は警察一家であること。現在は家族と離れ暮らしていること。困ったように志紀さんは話していくが幸せそうだった。やはり彼は幸せな家庭に育つたのだ。僕が憧れる家庭がそこにはあつた。

「じゃあ僕が美容師としての志紀さんのお客さん第一号になります」

「おひいいね」

彼は嬉しそうに笑いつものように僕の髪をがしがしと撫でた。

「梶くん？」

名前を呼ばれ振り向くと白い田舎をさし淡い水色のワンピースを着た女子がこちら見ていた。彼女はすらりとしていてワンピースがよく似合っていた。

こんな女の知り合いがいたんだろうかとしばらく見つめていると、その女は俯いてしまった。俯いたことでやっと小川だと気がついた。いつも俯き加減で話す彼女は制服を着ているとともに暗いイメージだったが印象が違つてみえた。私服の小川はどこかのお嬢様のようにとても綺麗だったのだ。

「小川……」

彼女は微かに笑い僕を待つようにして去る気配がなかつた。仕方なく志紀さんに別れを告げ小川につき合つこにした。

近くの喫茶店に入り席に着いた途端彼女は独り言のように「暑いね」とつぶやいた。長い髪を耳にかけハンカチで汗を拭つていた。そのひとつひとつの動作がとても綺麗だった。

「僕に何か用だつた？」

「え……あ、用つてわけじゃないけど」

彼女はもごもごと話し暑さで赤くなつた顔を俯むけた。

「あたし、梶くんと一度ちゃんと話してみたくて……」

「何を？」

「……わかんない、けど……」

小川は困つた顔をしていた。しばらく沈黙がつづいたあと注文したアイスコーヒーが運ばれてきた。小川は運ばれてきたアイスコーヒ一が入つたグラスを何をすることもなくじつと見つめていた。

「……梶くんは、自分がイジメられてる理由を知ってるの？」

僕もつられるようにしてじつとグラスを見つめていたようで小川の声に少し驚いた。そして今まで気づかなかつたが小川はとても綺麗な話し方をする人だ、と童話を聞くように聞き入つてしまつた。

「……いや、知らない。気にいらないんだろ。」「違うよ」

彼女は理由を知つてゐるかのようにきつぱり否定する。

「梶くんがかっこいいからだよ

「は……？」

突拍子もない答えたので変な顔をしてしまったのだろうか彼女はくすくすと笑つた。小さく笑う表情も女性らしくとても綺麗だった。

「なんてね。……半分嘘で半分本当。」

「……」

僕が黙つていると彼女は慌てて「ごめんね」と手を合わせた。

「繭がね、梶くんのこと好きだからだよ。」

”マユ”とは僕の隣の席で最近まで小川が仲よくしていた女子だつたと思う。小川はまだ冗談をつづけているのかと思っていたがだんだんと真剣な顔つきになつていった。

「でね、繭のことを永倉くんが好きなんだ……。」

彼女は遠くをみると、「言つてる意味わかるよね」とストローでコーヒーをかき混ぜた。

”ナガクラ”とは中心となつて僕を殴つていたヤツ。僕が殴つてしまつたヤツ。僕の知らないところでそんなことが起こつていたなんて気づきもしなかつた。友達がひとりもいない僕が気づけるはずもなかつたが知りたくもなかつた。

そんなくだらねえこと。

その夜、何も考えたくはなかつた。だけど小川に聞いた話しが頭のなかでぐるぐると回りどうしようもない思いを持て余していた。ベッドに蹲り、目を閉じた。

目を閉じた途端あの死体のことが頭に浮かびベッドから飛びおりクローゼットに仕舞つていたくしゃくしゃのTシャツを取りだした。そのTシャツに顔を埋め思い切り息を吸いこんだ。僕のニオイと微かに臭う死体のニオイ。そのままベッドに戻り蹲りながらTシャツについた死体の臭いを嗅いでいると紅潮し気が紛れるような気がした。

ふと机の上に置いていたココアボールが視線に入った。箱に描かれている変な鳥を見つめているといつの間にか涙が溢れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3520x/>

溺れる、連鎖

2011年11月17日19時35分発行